



Title	自己意識的感情の社会生態学的基盤：関係流動性の役割 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	前田, 友吾
Citation	北海道大学. 博士(人間科学) 甲第15988号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92342
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yugo_Maeda_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 前 田 友 吾

学位論文題名

自己意識的感情の社会生態学的基盤—関係流動性の役割—

・本論文の観点と方法

本研究の目的は、異なる文化圏に暮らす人々の間で、他者の面前で何らかの成功を収めた状況で経験される感情—特に誇りと羞恥—に差がみられる原因を、社会生態心理学の視点から明らかにすることである。先行研究では、成功場面において、西洋人は東アジア人よりも誇りを、一方、東アジア人は西洋人よりも羞恥を感じやすいことが示されてきた。本研究では、この文化差を生み出す社会環境要因として、関係流動性および社会的評判の獲得または回避に関する適応課題の違いに着目し、それらが人々の成功時の誇り感情と羞恥感情の感じやすさに影響するとの仮説を、国際比較研究を通じて実証的に検討した。

・本論文の内容

本論文は3部構成である。第1部では、研究の背景、理論仮説、検討課題を論じた。第1章では、背景として、自己意識的感情の定義とその認知的基盤に関する先行研究を概説した後、成功場面における自己意識的感情について文化差が見られてきたこと、またその文化差の原因に関する従来の説明を概観した上で、それらの限界を指摘した。先行研究では、他者から自己に対する評価を認知したり、自己と他者を比較したときに経験される自己意識的感情 (**self-conscious emotions**) に様々な文化差があることが示されてきた。本研究で取り上げるのは、特に成功場面において西洋人は誇りを、東アジア人は羞恥を感じやすいとの文化差である。この原因は、従来、各社会で歴史的に継承されてきた人間存在に関する共有信念—文化的自己観 (**cultural self-construals**) —の違いから説明されてきた。しかし、この説明には、近年指摘され始めた自己意識的感情の適応機能が考慮されていない点や、対人心理の文化差に関する先行研究との一貫性の欠如などの問題があった。

そこで第2章では、これらの限界を乗り越えるために本研究が採用する社会生態心理学 (**socio-ecological psychology**) の視座を説明した上で、キー概念である関係流動性 (**relational mobility**) を紹介した。社会生態心理学とは、人間が集合的に作り出している集団や社会が、翻って適応すべき環境となっていることを踏まえ、人間の心理・行動傾向を社会環境に対する適応方略として理解しようとするものである。関係流動性とは、当該社会における対人関係の獲得と維持に関わる選択の自由度を指しており、その違いは各社会での主要な適応課題の違いをもたらす。具体的には、高関係流動的環境では望ましい対人関係の獲得・維持の競争が激しく、他者からの好意的な評判を獲得することが重要である。一方、対人関係が固定的な低関係流動的環境では、既存の対人関係の悪化・排斥を避けるため他者からのネガティブ評判の回避が重要である。

第3章では、関係流動性が、成功状況における自己意識的感情に与える影響について理論仮説を導出した。誇りと羞恥のそれぞれが、その表出と動機付けへの影響を通じて、ポジティブ評判獲得とネガティブ評判回避という適応課題の解決に寄与するとの考察に基づき、高関係流動性では成功時の誇りが優勢となり、低関係流動性社会では成功時の羞恥が優勢となると予測した。

第2部では、以上の理論仮説を検証するために行った計7件の実証研究について詳述した。全ての研究は、先行研究で関係流動性の違いが明らかにされてきた日本と米国の間で実施した質問紙法の国際比較研究である。第4章では、成功状況での誇り・羞恥経験に先行研究と同様の文化差が見られるか、またその文化差は、当該社会間の関係流動性の違いによって説明されるのかを検討した。研究 1-1 では、予測通り、成功状況での誇り経験は日本よりも米国で高く、またその文化差は、参加者間でのローカルな社会環境の関係流動性の認知の違いによって媒介された。研究 1-2a と研究

1-2b では、関係流動性の違いが、成功に対して周囲の人たちからどのような評判が寄せられるかについての期待の違いを生み出し、それがさらに成功時の誇り・羞恥経験に影響を与えるとの仮説を検討した。その結果、社会的成功者に対して他者から報酬や賞賛が寄せられるだろうとの「成功賞信念」は、日本人よりも米国人の方が強かった一方で、社会的成功者に対して罰や批判が寄せられるだろうとの「成功罰信念」は、米国人よりも日本人の方が強かった。さらに、媒介分析により、成功場面羞恥の日米差は、関係流動性の低さと、それに伴う成功罰信念によって媒介される一方で、成功場面誇りの日米差は、関係流動性の高さと成功賞信念によって媒介された(注:研究 1-2a では、後者の媒介効果は有意傾向であった)。

第 5 章・6 章では、各社会において「適応的」であると考えられる誇りと羞恥の経験が、その経験者に本当に高い適応度をもたらしているか、またその適応性は、どのような社会的相互作用を通じて達成されているのかを検討した。まず第 5 章では表出機能に注目し、成功時の誇り・羞恥の表出者に対する評価が、関係流動性によって異なるのかを検討した。その結果、誇り表出者に対しても、羞恥表出者に対しても、日本人よりも米国人の方が高く評価するという予測と一貫しない結果が得られた。また、誇り表出者と羞恥表出者に対する評価と関係流動性の関連にも解釈可能な一貫性が見られなかった。(研究 2-1, 2-2)。

第 6 章では、感情の動機付け機能に着目し、成功時の誇りと羞恥の経験の強さが、関係流動性の異なる環境下で適応的となる動機づけの違いと関連している可能性を検討した。その結果、関係流動性と誇り・羞恥感情の関連を、成功獲得動機が媒介し(研究 3-1)、さらには、関係流動性と競争的成功動機が誇りの日米差を説明する一方で、関係流動性と規範的同調動機が羞恥の日米差を説明するという、予測通りの結果が得られた(研究 3-2)。

第 3 部では、総合考察を行った。第 7 章では実証研究の結果をまとめ、理論的解釈を行った。

第 8 章では、本研究の意義、限界と今後の展望を述べた。本研究は、自己意識的感情の適応機能に関する理論と社会生態学的環境の影響の理論との統合を通じて、人の成功時の自己意識的感情経験に関する新奇な理論を提唱し、実証的に検討した。これにより、従来理論では難しかった文化差の原因の説明に成功した。また、本論文の知見は、実践的な意義も持つ。例えば、現在喫緊の課題である教育・企業文脈における適切なフィードバックの与え方を検討する際に、被評価者を取り巻く社会環境の性質を考慮すべきだとの重要な示唆を与えてくれる。

一方、本研究の限界として、全ての研究が、質問紙による場面想定法によるものであった点や、研究 2 において、予測していた誇り表出者と羞恥表出者の評価の文化差が見られなかったこと、本研究で用いた仮想的な場面が、人前での成功状況に限定されていたこと、誇り・羞恥感情以外の自己意識的感情に対する検討が必要であることや、各国データの代表性の問題などといった限界が議論された。最後に、今後の展望として、適応感情と適応行動を生み出す生物学的メカニズムの検討の必要性、文化内における個人差の検討と適応戦略を身につける発達過程の検討という 3 つの方向性について述べた。